深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 各作品の季語と季節を確認し、季語のある句とない句の印象の違いについて、考えてみよう。

【答】季語があればその季語の内容とあわせて連想される、それぞれの季節ごとの景物がある（具体的には各句の解説や問いの解答を参照）。つまり季語が創り出す時間の流れや循環、歴史性が読みの情報として与えられるが、無季の句にはそれがない。本教科書所収の句の中で、明確な無季句は二句、季語は入っているが無季と解釈ができる句を含めると四句あり、すべて近代以降である。

以下の通り便宜的に各句に番号を付した（以下の問いも同様）。季語を季語として用いているものには傍線を付し、季語が入っているが、季語として意識されていないものは太字で示し、季節を各句の下に示した。

【俳諧】

1 かれ枝に烏のとまりけり秋の暮　秋
2 山路来て何やらゆかしすみれ草　春
3 旅に病んで夢は枯野をかけめぐる　冬
4 春の海ひねもすのたりのたりかな　春
5 五月雨や大河を前に家二軒　夏
6 牡丹散つてうち重なりぬ二三片　夏
7 有明や浅間の霧が膳をはふ　秋
8 これがまあつひの栖か雪五尺　冬
9 痩せ蛙まけるな一茶これにあり　春

【俳句】

1 いくたびも雪の深さを尋ねけり　冬
2 遠山に日の当りたる枯野かな　冬
3 うしろすがたの**しぐれ**てゆくか　無季（冬）
4 たましひのたとへば秋のほたるかな　秋
5 湯豆腐やいのちのはてのうすあかり　冬
6 滝落ちて群青世界とどろけり　夏
7 雪はげし抱かれて息のつまりしこと　冬
8 白梅や天没地没虚空没　春
9 秋の暮大魚の骨を海が引く　秋
10 万緑の中や吾子の歯生え初むる　夏
11 炎天の遠き帆やわがこころの帆　夏
12 蝶墜ちて大音響の**結氷期**　（冬）
13 囀りをこぼさじと抱く大樹かな　春
14 百代の過客しんがりに猫の子も　春
15 春ひとり槍投げて槍に歩み寄る　春
16 胸の上に雁ゆきし空残りけり　秋
17 戦争が廊下の奥に立つてゐた　無季
18 彎曲し火傷し爆心地のマラソン　無季
19 一月の川一月の谷の中　冬
20 胡桃割る胡桃の中に使はぬ部屋　秋

21陽炎より手が出て握り飯摑む　　春

▼ポイント▲　各句の解説参照。

山頭火の句は五七五にとらわれない自由律で、季語よりも五七五ではない点に着目して比較するのもよい。五七五にとらわれない自由律で、自嘲的内容といいつつも、七七調の軽快なリズムをもっていることで、句の内容と韻律のバランスができあがっている。赤黄男の句は、実景に基づくより、象徴性の濃い詩的な表現であり、「結氷期」は冬の季語ではあるが、季節の実感からは遠いだろう。白泉や兜太の句は自然（季語）の代わりに、人間にとって有史以来の大問題である「戦争」を詠んでいる。俳諧の発句から数えれば四百年の歴史を有する俳句において、特に重要視されてきた季語を抜くということは、季語に頼らない句作の実践であり、表現の模索が行われていることに気づかせたい。

2　季語のある句について、季語の果たす役割を考え、発表してみよう。

【答】俳句における季語の重要な働きとしては、

1　具体的な季節や風景を想起させる。

2　その句の詠まれた季節内の現在（いま・ここ）を示す働きがある。従って、句中の現在ではない（例えば、「君を見てあのころの夏思い出す」の思い出している人の現在は不明なまま過去の季節はある）季節は原則、詠み込まれない。

3　季節そのものをテーマとする場合は、季語が作品世界の主役（焦点／図）になり、それ以外にテーマがある場合には脇役（背景／地）になる。また、図と地の往還によって奥行きの出てくる場合もある。

▼ポイント▲　各句の解説参照。

例えば、「これは○○の句である」の「○○」にそれぞれの季語をあてはめて考えてみると、それぞれの句の季語が主役か脇役かが見えてくるのではないだろうか。それをきっかけにして、句の内容の理解を進めることも一つの方法であろう。

3　印象に残った句を選び、言葉に託された風景や、作者の心情を想像してみよう。

【答】基本的には、過度に恣意的でなければ生徒に自由に想像させて読ませたい。【俳諧】は各句の「現代語訳」と「鑑賞」を参照。近世の発句は、単に叙景の句に見えても、和歌以来の伝統的な詠み方が意識されている点が近代以降の俳句とは異なる。【俳句】については、読解の補助線を示しておく。5、6、11は脚問の解答も参照。

1　作者正岡子規は不治の病（脊椎カリエス）で病床にあり、起き上がって外の様子を見ることが困難な状況にあった。また、南国（愛媛）生まれの子規にとって、世界を白く染める積雪は比較的珍しい現象であったと思われる。さらにいえば、雪は日本の伝統的な自然美の代表とされる「雪月花」の一つであり、その雪を愛で味わいたい気持ちがあっただろう。伝記的事実は分からなくとも、生徒に雪が積もるとどこかわくわくする気分があれば、**何か理由があって思うように雪を見ることができず**

何度も様子を尋ねる子規の心のもどかしさを思いやることはできよう。逆に、雪国であれば、積雪の不安を詠んだ句とも詠めるかもしれない。一旦それらを自由に想像させた上で、伝記的な情報を示す進め方も可能である。

2　山本建吉は、「寒むざむとした冬枯の景色の中で、日の当つた遠山だけが、なにか心の救い、心の支柱となる」と鑑賞し（「現代俳句」）、虚子の子息である高浜年尾は、この句は虚子が故郷の松山の生家あたりから見えた実際の風景を思い出して詠んだ郷愁の句であり、日の当たる山が「何となく〝たよりになる〟気持ちだった」と父から聞いたという（「古典と現代」明治書院）。いずれも**遠山の「日」になにかしらの希望を見出す作者の心情を指摘するもの**。日々を生きる人間の心情を風景に仮託したものと読める。

3　脚注に示した通り、「しぐれ」は冬のにわか雨。「しぐれる」は、しぐれが降る意味の他、古語においては、涙を流す、という意味もある。一見すると、客観描写に慣れている生徒には、他者が冬のにわか雨に濡れていく様子を描写しているように読めるかもしれないが、俳句で主語が示されていない人の動作は、基本的には作者本人のもので、一人称と考えてよい。この句にはやや長い前書きがあり、**深い迷いの上に流浪の旅にでた己を自嘲したとする句である。いわば作者による自画像のようなものと考えるとわかりやすい。**

4　伝記的情報としては、芥川龍之介への追悼句として知られる。さまよう魂を秋のほたるに喩える。秋ほたるは、立秋を過ぎて飛ぶほたる。ここでは、**盛りを過ぎた季節のほたるの光から連想されるイメージ（か弱さ、少なさ）は導き出せるのではないだろうか。**追悼句という伝記的事実からは、孤独感や寂寥感などを想像できれば望ましい。

7　作者は夫と死別しており、伝記的には、夫恋の回想句として解釈される句である。句だけを見ても、非常にドラマティックな描写であり、そこから**激しい恋情を読み取ることは可能であろう。**

8　一見、抽象的で難解な印象の句であるが、脚注で示したとおり、「**天没地没虚空没**」**は、作者が阪神淡路大震災に罹災したときの、文字通り天地がひっくり返った、という以上の、虚空すらなくなってしまったかのようだ、という実感や感慨が籠もった表現。**震災時、作者宅は全壊したが、二階のトイレにいたことで、閉じこめられたものの死を免れ、後に救出された。そのとき、自宅の庭か近隣に咲いていた白梅が香っていたのであろうか。生徒には、まず脚注を参考にし、地震のなかで揺さぶられた作者の感覚を想像させたい。また、「虚空」は一般に何もない空間をさすが、もともと仏教用語である。作者は仏教に造詣が深く、折々に仏教用語を交えた句作をする特徴があるが、あまり深入りしなくともこの句の解釈は可能であろう。

9　映像的、かつ、想像の余地の大きい句である。季語「秋の暮」は、「秋の夕暮」の意と、「秋の末」の意を持ち、時に両方を含意する。句の初出は雑誌「断崖」昭和三十五年十一月号で、秋の終わりにあわせて発表されている。また、「**骨**」**となった魚という、死のイメージからは、一日の終わりと秋の終わりを共に感じ取ってよい**ように思われる。浜辺に打ち上げられた

「大魚の骨」は、どのようなものを想像するかはまったく読者に委ねられているが、この句は、作者が住んだ葉山海岸で実際に見た風景から詠まれたものと言われており、空想の世界ではなく、実際の風景を詠んだ作品であることは前提に考えさせたい。

10　俳句の形としては、自然世界と人間世界、大と小、遠景と近景、緑と白、漢語と和語など、対比のわかりやすい要素で取り合わせた句と言える。この前半部分を山本建吉は「粗々しい力強いデッサン」と評し（「現代俳句」）、「吾子の歯生えそむる」を「単刀直入」な叙述、「事物の核心」と述べ、この自然と人間の取り合わせを、「何れも萌え出づるもの、熾（さかん）なるもの、創り主の祝福の下にあるもの、しかも鮮やかな色彩の対比。（中略）**生命力の讃歌であり、勝利と歓喜の歌**である。」と称揚している。一方、青木亮はこの句の取り合わせについて「父の喜びというより、**両者の旺盛で逞しい生命力が響き合いながら発現しつつあることの驚き**」の措辞であるとし、「個人の喜怒哀楽を超えた、生前からそうと定められた生命のプログラムを目の当たりにした、**居心地が悪くもある畏怖めいた心情**」と述べる（「近代俳句の諸相」）。解釈の課題は、自然と人間のこれ以上なく生命感の極まる感覚をいかように受けとるか、ということになるだろう。

12　「結氷期」は文字通り、水があれば氷が張る厳冬期である。**全てが凍り付いている世界の様子を、蝶ほど軽い存在でさえ、そこに落ちれば大音響をたてるほどの緊張状態なのだと表現している。**象徴的ではあるが、まったく歯が立たないほど困難ではないだろう。なお、蝶も春の季語であるが、この句の主たる季語は結氷期である。

13　季語の「囀り」は、繁殖期を迎えた小鳥たちの盛んに鳴く声を言う。恋の季節を迎え、**懸命に囀る鳥たちを、大切に見守るようにしっかりと大樹が抱え込んでいる、というのである。**

「こぼさじ」という擬人法からあふれる母性を読み取ることはたやすいだろう。

14　「百代の過客」は「おくのほそ道」冒頭文から引いたもの。本来なら時間の永遠性を言うものだが、「殿に猫の子も」というこの句の文脈に沿って考えると、その時間の中に生きる、すべての生きとし生けるものが含意されることになろう。それら生き物は永遠の時間の中で生きる旅人のようなものであり、その最後尾にこの猫の子もいる、というのである。**格調高く表現される形而上的な世界観の最後尾に、いとけない猫の子を取り合わせたのがこの句の眼目。**永遠に流れる時間と比べればほんの一瞬にすぎない生き物の生の短さにもののあわれを感じ取る方向と、生まれてまもない子猫の今そこにある限りない可愛さを同時に感じ取ればよい。なお、作者は猫好きで知られており「くすぐつたいぞ円空仏に子猫の手」などの作品がある。

15　単に槍を投げるという表現だけからすれば、古代の戦なり狩猟なども想像はできるだろうが、「ひとり」の人が投げた槍を取りに「歩み寄る」となれば、命のやりとりの緊迫感は薄く、やはり陸上の練習がふさわしいのではないだろうか。また、投げている人を見ている目線なので、この「ひとり」は作者自身ではないように見える。作者の自註によれば、「春の午後ひっ

そりした大学のグランドで見た風景。青春の倦怠感が描いてみたかった。」（「自註現代俳句シリーズ第2期30　能村登四郎集」昭和五十四年、俳人協会）とある。すぐに「青春の倦怠感」までたどりつかなくとも、個人競技の持つ孤独さを生徒に考えさせることは可能であろう。そこで**「歩み寄る」という澄刺とは遠い仕草の中に、練習があまり上手くいっていない悩みや、倦怠感を含めた様々な葛藤が感じ取れればよい。**

16　「雁ゆく」（「帰る雁」「雁帰る」など）は春、越冬を終えた雁が北方へ帰ることを言う。逆に秋に飛んでくることは「雁渡る」「落雁」などという。「胸の上」という措辞から、寝ている上を雁が飛ぶ姿を想像できよう。草原で昼寝でもしていると思うかもしれない。それでもかまわないが、伝記的な情報を前提に解釈すると、作者は肺を病み、昭和二十三年から二十五年にかけて、東京清瀬の結核療養所で病床にあった。当時結核はまだ死病である。**三十代の若さで死の不安を抱え、思うままにならない己の病身を象徴するのがこの「胸」であり、その上を翼を持って自由に空を舞う雁が対照的に詠まれていることになる。**しかし、詠嘆の「けり」は「空」にかかっているのであり、その残された春の青空のすがすがしさの中に、未来への不安や希望などの作者の持ったであろう様々な感慨までを想像させたい。

17　「廊下」は一本の直線であり、その「奥」に戦争が立っているという、**我が身に迫る戦争の微妙な距離感を擬人化して言うことで、漠然として実態の摑みづらい戦争の持つ不気味さを、独特の感覚でとらえた句。**作句時期から、伝記的には日中戦争の長期化と暗くなる世相を反映しているとみてよいが、それに限らず、普遍的な人間にとっての戦争のありようを感じさせる句として様々に想像させたい。

18　作者が仕事で長崎に数年住んだ時の作句。ゆえに「爆心地」は長崎市に投下された原爆を念頭におかれているが、それが広島と解釈されても差し支えはないだろう。一見抽象的で意味の摑みづらい句であるが、「彎曲し火傷し」という、硬質な音読みの熟語と動詞「し」の反復による力強い表現が、「マラソン」に係っていることから内容の理解を深めさせたい。現在**目の前には爆心地だった街でマラソン大会が開かれていて、ランナーたちの必死で走る形相や姿あるが、それがかつて被爆し焼かれ街をさまよった無数の死者たちと重なってみえているというのであろう。**単にステロタイプに原爆の悪を批判するというより、忘れられがちな多くの死者と心を共にしていこうとする意志を感じさせる句であるように思う。

19　筆者は甲斐の山深い里に暮らした。この句は自宅近くの景を詠んだものとされている。なんの技巧も感じさせないシンプルな構造の句であり、「一月」という季語には和歌俳諧の歴史的連想もない。「一月の川」、「一月の谷」、つまり一年の初めの、厳冬期と言ってよい川と谷の風景を、読者の想像力にすっかり委ねている作品といえる。**余白だらけであり、ある意味で俳句形式の究極のありようである。**作者自宅近くの川は小さく、また雪も少ないところと言われているが、どのような風景か、生徒には自由に想像させたい。

20　作者によれば、「割ったクルミに実のない空間を、クルミのあるべき「部屋」と思い、そこに中身がないことは、無用の用

を狙っての企みか、機械などにある〝遊び〟かと考えた。さらに、誰かが〝ものごとの核心には空虚がある〟と言ったように、この欠落は人間の英知を超えた、なんらかの幽玄不可解な目的のための部分なのかもしれないとも思った。人間の内部を眺めても、そこに同様の不思議な部分があるのではなかろうか。」（「現代の俳句16　自選自解　鷹羽狩行句集」白鳳社）との自解がある。**要は、クルミの殻の中の不思議に広い何もない空間を擬人的に「部屋」ととらえ、では何のための部屋なのか？　と、その存在の不思議に思いを馳せているということであろう。**生徒にも、この空間の不思議を様々に想像させたい。

▼ポイント▲　【答】の太字部分を参照。

言葉と表現の解答例

1　作品中の切れ字「や」「かな」「けり」の働きについて調べてみよう。

【答】「や」は、文法的には間投助詞の「や」で、感動・詠嘆を表す働きをもつ。俳句においては、この「や」で文脈が途切れ、その前後を様々な関係で結ぶことで一句が完成する働きがある。そこでまったく大きく飛躍する場合もあれば、一見断絶しつつ不即不離の関係をとる場合もある。また、倒置を元に戻すと、元の文脈になるものもある。「かな」「けり」は、多くの場合、句末に用いられており、文法的には、「けり」は助動詞で過去の詠嘆（いわゆる気づきの「けり」）、「かな」は終助詞で詠嘆の意味である。これらは、詠嘆の意味を示すと共に、句末で言い切る形をとることで、一句としての意味を完結させる働きをもつことになる。また、もともと連句から発展した俳句は、一句独立を示すことに意識的で、切れ字の働きの一つはこれである。

▼ポイント▲　所収句中、切れ字「や」「かな」「けり」が用いられているのは、以下の十三句である。なお、「滝落ちて群青世界とどろけり」の「けり」は「とどろく」の已然形に完了・存続の助動詞「り」が接続したものであり、切れ字「けり」とは異なる。生徒には、まず古語辞典で意味用法を確認させたい。

【俳諧】
1かれ枝に烏のとまりけり秋の暮
4春の海ひねもすのたりのたりかな
5五月雨や大河を前に家二軒
7有明や浅間の霧が膳をはふ

【俳句】
1いくたびも雪の深さを尋ねけり
2遠山に日の当りたる枯野かな
4たましひのたとへば秋のほたるかな
5湯豆腐やいのちのはてのうすあかり
8白梅や天没地没虚空没
10万緑の中や吾子の歯生え初むる
11炎天の遠き帆やわがこころの帆
13噂りをこぼさじと抱く大樹かな
16胸の上に雁ゆきし空残りけり

【答】で示したことに補足しておくと、【俳諧】1の中七の「けり」については、問いの解説を参照。【俳諧】5の「や」は前後で同じ視界に収まる自然界と人間界の二点の景を取り合わせている。7の「や」は前後で倒置ととらえられよう。【俳句】5の「や」は、切れ字とはいえ、「湯豆腐」と「うすあかり」をまったく無縁のものと見た場合、一句として何を表現しているのか分からなくなってしまうだろう。一方で8は「白梅」と「天没地没虚空没」の間に大きな飛躍がある。人間の感覚する世界がまるまるひっくり返った中、梅の香ばかりが清らかに漂っている、というのであり、「国破れて山河あり　城春にして草木深し」の気分に通じる、自然と人間の対比（取り合わせ）がなされている。10も「万緑の中」という自然世界と「吾子の歯」という人間世界（あるいは世界と吾）の対比の切れ目に用いられており、11は、実景の帆を「や」で詠嘆し、そこから受けた感動を己に重ね、「こころの帆」と比喩で表現している。同じ「帆」という語を使いつつ、前の実景から得た詩的把握を後に置くという、加工の過程をそのまま句にしたような表現となっている。また、これらは四句とも近現代の作品であるが、10を除き、【俳諧】5や、芭蕉の「古池や蛙飛びこむ水の音」「夏草や兵どもが夢の跡」等の代表句の数々と同じく上五末に切れ字「や」を用いて句末を体言止めにしており、伝統的といえる俳句の型を踏襲していることがわかる。

（橋本　直）